

MYU

Public University Corporation

MIYAGI UNIVERSITY

宮城大学高大連携シンポジウム

大学と高等学校の 協働による探究型学習の さらなる可能性を探る

実施報告書



INDEX

- p02 開会挨拶
- p03 高大連携シンポジウム開催の趣旨
- p04 基調講演1 アクティブ・ラーナー育成の課題-高大接続と教職学協働を中心に-
- p10 基調講演2 高崎経済大学「高大コラボゼミ」の成果と課題
- p16 宮城大学の高大連携の取組紹介
- p18 ディスカッション
- p21 アンケート集計結果より
- p22 独立行政法人教職員支援機構「平成30年度教員の資質向上のための研修プログラム」概要

開会挨拶

宮城大学 副学長（教育・高大連携担当） 徳永 幸之



宮城大学副学長の徳永でございます。本日は御多忙の中、多くの方々にお集まりいただき誠にありがとうございます。

宮城大学は昨年開学 20 周年を迎えまして、これを機に改めて大学の理念を再定義いたしました。その中の人材育成目標として、「豊かな人間性」「高度な専門性」「確かな実践力」を備えた人材を輩出していくこととしております。そのためには学生の「主体性」、「知的好奇心」、「志」を育てていく、ということが重要と考えております。

今、世の中で「アクティブ・ラーニング」ということが盛んに言われていますが、本当に「主体性」を身につけられているか、我々も試行錯誤しているところです。一方で高校においても探究型学習などの取組の中で、「主体的な学び」を身につけて頂いて

いるところと思います。

今後、大学は大学で、高等学校は高等学校で、ということではなく相互が連携し、高校から大学へのスムーズな移行を進めることで、今後の人材育成に有効になっていくと思われま。そこで、本日は県立広島大学から馬本勉先生、高崎経済大学より矢野修一先生をお招きいたしまして、同じ公立大学における高大連携の先駆的な事例についてお伺いしながら、学生の主体的な学びに結び付けていければと考えております。

本日のシンポジウムは、皆様が考える教育と宮城大学が考える教育について共有するきっかけにしたいと考えておりますので、様々な角度からの御発言、御意見を頂戴できればと思っております。どうぞよろしく願いいたします。

宮城大学高大連携シンポジウム

「大学と高等学校の協働による探究型学習のさらなる可能性を探る」

日時：平成 31 年 2 月 18 日（月）13:00～16:00

会場：住友生命仙台中央ビル（SS30）8 階 第 1 会議室

後援：宮城県、宮城県教育委員会、公立大学協会



高大連携シンポジウム 開催の趣旨

宮城大学 基盤教育群長兼食産業学群 教授 川村 保



基盤教育群長兼食産業学群教授の川村と申します。本日は御多忙の中、本シンポジウムに足をお運び頂きましたこと、重ねて感謝申し上げます。後ほど後半で本学の取組について詳しく御紹介を申し上げますが、本年度本学では独立行政法人教職員支援機構が実施する「教員の資質向上のための研修プログラム」の採択をうけまして、本シンポジウムもそのプログラムの一環として開催させて頂いております。

本学としては、今後の高大連携のあり方として「高校生が大学の授業を受けること」や「大学教員が高校生に指導を行う」といった従来型の連携のみならず、「高校生と大学生の協働」あるいは「高校教員と大学教員の協働」を通じて、相互の教育的な連携を高めていくことを目指してまいりました。

その一つのキーワードとして新学習指導要領でも謳われている「探究」という言葉が、今後の高大連携における大きなポイントとなるように考えます。大学において学習者が主体的、対話的に深く学ぼうとする、いわゆる「アクティブ・ラーニング」という言葉が叫ばれて久しくなりますが、卒業研究やゼミ活動といっ

た取組はまさにアクティブ・ラーニングの宝庫であり、大学での研究活動のプロセスを高等学校の探究型学習に応用することや、逆に大学側も高等学校の生徒の指導の様子などを参考にするなど、「探究」を合言葉に、相互の教育リソースを共有しながら発展させていくことが今後の高大連携・高大接続改革を押し進めるポイントとなるのではないかと考えています。

本日はそのようなことを先駆的に取り組まれている 2 つの公立大学からヒントを得るべく、県立広島大学の馬本先生からは、アクティブ・ラーナー育成の取組から見てきたことや実際の難しさなどについてお話し頂き、また高崎経済大学の矢野先生からは、「高大コラボゼミ」の取組を御紹介頂く中で高大連携活動の成果や課題についてお伺いできればと考えております。後半はそれらの御報告を踏まえて、高校教員、大学教員それぞれの御立場から話題を御提供頂き、今後の高大連携活動のあり方や目指すべき姿を私達自身も模索していければと思いますので、是非皆さまからの忌憚ない御発言を頂戴できればと思います。本日はどうぞよろしく願いいたします。



基調講演 1

アクティブ・ラーナー育成の課題

— 高大接続と教職学協働を中心に —

県立広島大学 学長補佐 馬本 勉 氏



[1] 広島から来ました馬本と申します。今日はどうぞよろしくお願い申し上げます。

県立広島大学は2014年度に大学教育再生加速プログラム（AP事業）という文科省の補助事業で、テーマIアクティブ・ラーニングの選定を受けました。このプログラムは5つのテーマで70を超える大学・短大・高専が選ばれていますが、そのうちのひとつであり、アクティブ・ラーニングで選定されているのは9つです。今年度で5年目になりました。来年度が最終年度ということで、これまでやってきたことをまとめる時期に入っています。

[2] 今日は、AP事業で得られた事と、その枠組みの中で高大連携をどのように考えてきたのかご紹介できればと思います。配付資料に沿って話を進めてまいります。私たちの大学は地域に根ざした大学として、資料でも掲げるような人材育成目標を掲げ、将来にわたって学び続ける人材を育てていきたいと考えています。

[3] さきほど触れた大学教育再生加速プログラムは、当初2014年度から4年間の計画を立てていたのですが、2016年度に高大接続改革推進事業として2年間延長することとしました。その際、テーマIだけでなく、テーマII「学修成果の可視化」、テーマIII「高大接続」の要素を加えた目標に再設定し、早いものであと1年となりました。

[4] こちらが私たちの考えを図式化したものです。高等学校、大学、そして社会へと送り出すときの、高等学校と大学の接続が今大きな話題になっているわけですが、どうしても入試を中心に考えられがちです。ここを人材育成という形で接続できないか、そして、高等学校での学びを大学でのアクティブ・ラーニングでさらに伸ばして社会に送り出せないか、ということを検討してきました。

[5] そのために私たちは高等学校の様子をしっかりと知らなくてはいけないですし、大学においても、3つのポリシー（学位授与方針、教育課程編成方針、入学者受入方針）の中にアクティブ・ラーニングの要素を盛り込んで、高等学校までの学びを我々もしっかりと受け入れて育てていこうという事をやっています。今から2年ほど前に3つのポリシーの公表が義務化されたときに、高等学校までの学力の3要素が大学の学びにどのように繋がっていくのかを検討し、特に高大接続を意識した形で現在の3つのポリシーを策定したところです。

[6, 7] 県立広島大学は、来年創立100周年を迎えます。県内3

つのキャンパスが直線距離で数10キロ離れています。もともとそれぞれ別の大学だったため、1つになるとなった時、教員・学生の移動に時間がかかるなど、マイナス要因しか浮かびませんでした。しかし5年前にAP事業申請の際に「離れているキャンパスが、実はプラスになるんだ」と発想の転換をし、それぞれの特性をを持った地域との繋がり、専門の違う学生同士の交流で何か得られないか。そういう仕掛けを作ることをAPプログラムの一つの目玉として考えていきました。

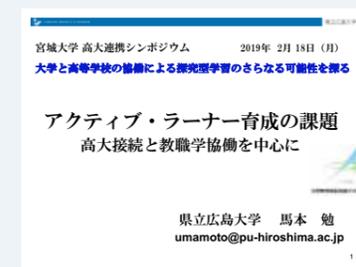
[8] 私達はこれをCLAL（Campus Linkage Active Learning：クラール）と呼び、キャンパス間連携、地域連携を含めたアクティブ・ラーニングを考えていくことにしました。その中で、アクティブ・ラーナー（ALer）の育成という観点から、これまでの取組をご紹介させていただきます。

[9,10] まず、アクティブ・ラーニングの導入・普及を全学的に進めていこうということです。しかし、アクティブ・ラーニングも色々な考え方があります。実際のところ、本当のアクティブ・ラーニングとはどういうものなのかを、高等学校との連携を通じて、今私たちが学んでいるところです。

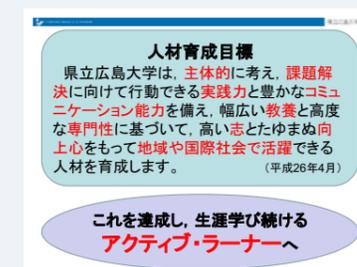
そこで、それを支える二つの仕組みを導入しました。1つはアクティブ・ラーニングを牽引する教員集団、いわゆるファカルティ・ディベロッパー（FDer：エフダー）と呼んでいますが、学内の中にFDer教員を自前で育て、その人達に牽引してもらうという事です。そして2つめに、学生自身が他の学生を支援する「学修支援アドバイザー」の養成です。先輩学生が後輩学生に、様々な意味で良い刺激を与えてもらう仕組みを作っていました。

もともと「アクティブ・ラーニングの導入」「FDerの養成」「学修支援アドバイザーの養成」という3本柱で始まったAP事業ですが、2016年度の延長の際に追加で考えたのが、「学修成果の可視化」と「高大接続改革の推進」です。アクティブ・ラーニングを進める上では、「学生がどう変わったのか」という学修成果を可視化するしくみが必要だろうと思いました。また、県内の高校と、果たしてこれまでうまく接続ができていたのだろうか。もう一度見直して、県立の学校同士がもっと近くなっていいのではないかと考えました。

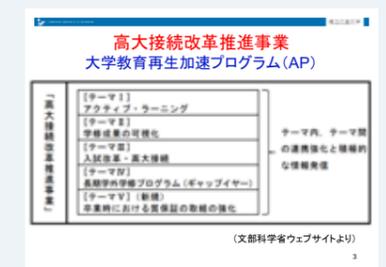
これらを踏まえ、最後に教員・職員・学生（教職学）の協働です。大学全体を支えるためには、学生も交えて教員・職員・学生一緒になってやっていこうではないかという事で、今年度から「協



[1]



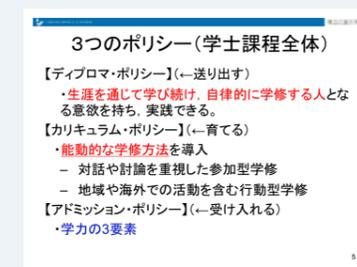
[2]



[3]



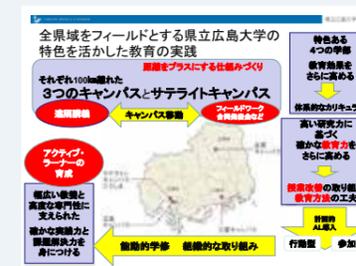
[4]



[5]



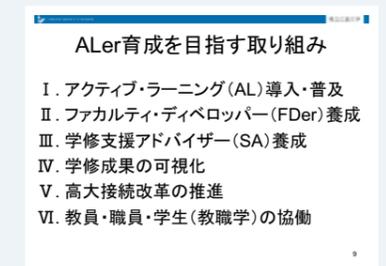
[6]



[7]



[8]



[9]

働」を強調しながら取り組んでいます。

[11~15] それぞれの取り組みを簡単に説明いたします。アクティブ・ラーニングの導入・普及についてですが、まず「参加型学習」として、グループワークやディスカッション、プレゼンテーション等を授業に取り入れようと考えました。もう一つ、「行動型学習」として地域に出かけたり、キャンパスを結んだりという学修を、積極的に取り入れたり組み合わせることでいい効果が出せないだろうかと考えました。現時点でどのくらいアクティブ・ラーニングが行われているか調べたところ、2014年度末で66.9%、2017年度末で92.1%でした。主としてはグループワークやディスカッションが多い傾向です。実際にアクティブ・ラーニングを導入した結果、「学生の理解が促進された」とか「積極的な姿勢が見られた」とか「参加の度合いが高まった」など、教員からはこのような感想がでています。

[16~19] 次にファカルティ・ディベロッパーの養成についてですが、学科の中で2人以上、合計で30人以上のFDerを自前で養成できないかと考えました。はじめはファカルティ・ディベロッパーとは何かということから始めて、講師を招聘したりなどしました。FDerの教員は、自ら積極的にアクティブ・ラーニングを取り入れる事、他の教員にも広げていくことからスタートしましたが、現在はAP事業の運営にも関わってもらうようになりました。また養成講座を開催して教員間の取り組みを発表し合ったり、ティーチング・ポートフォリオを行っています。現在65名のFDerがおり、どこまで、何をやればいいのか、自己評価ルーブリックに基づいて役割を果たしています。

[20~23] 学修支援アドバイザー（SA）は、先輩学生が後輩学生を支援する取り組みです。たとえば、ラーニング・コモンズで個別の学修相談を行ったり、教員の求めに応じて授業のサポートを行ったり、グループワークのファシリテーターを行ったり、というようにSAが色々な役割を担うことによって、SA自身がアクティブ・ラーナーのトップランナーになって欲しいという思いをこめて、研修などしています。

では実際にSAがアクティブ・ラーナーのトップランナーとして育てているのかどうか、色々な場面で求められるようになりました。そういったこともあり、私たちは学修成果の可視化に取り組むようになり、そのひとつのツールとして、ALer自己評価ルーブリックを現在試行的にやっています。そのほか、教員も授業にルーブリックを導入することによって、そこで学修者がどう変わっていったのかをできるだけ意識して、その様子を把握するように努めています。一例として地域情報発信論という授業を担当していますが、地元の新聞社の記者・カメラマンに講義をして頂いて、学生が自ら問いを立て、フィールドワークをして取材をし、意見表明するといった授業です。今年から授業を受ける前と、受けた後に、自らがどう変わったかを記録してもらうことで、自分の学修成果を実感してもらっています。

[24] ここから高大接続について話します。これまで私たちは模擬講義という形で高校に出かけていきますし、オープンキャンパスなどで高校生がたくさん大学に来てくれます。そういう意味での行き来はもちろんあったわけですが、それをさらにもっと先の

ステージに進めていくために何かできないかと、県の教育委員会と議論を重ねてきました。

[25~27] スタートはAP事業に採択された2014年です。この年、広島県の教育委員会では「学びの変革アクションプラン」を策定し、小学校・中学校・高等学校と積み上げていく中で、コンピテンスを中心に考え、主体的な学びに変えていこうということを目指しました。これは私たちが大学で社会人基礎力や学士力などの汎用的な力をアクティブ・ラーニングで高めていこうということと通じているものです。

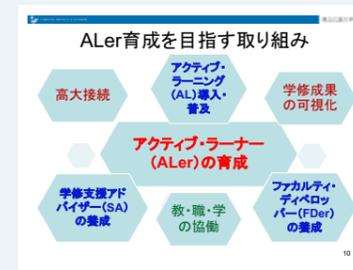
人材育成の目標についても、県の教育委員会と、私たちが文科省に提出した書類に書いたものと共通点があった。そこでまずは勉強会を開きました。最初に県の教育委員会から大学の方に来てもらって説明をしてもらい、意見交換をしました。そして、県の高等学校が行っている教育研究・実践合同発表会に我々も参加して、色々な取り組みをしている高等学校の他に、大学の組織的な取り組みと一緒に発表するようになりました。例えば今回は商業高校がさまざまな商業活動を実践的に行う取組、また普通科と専門の学科を持っている学校の総合的な学習の時間での取組が発表されました。

大学では、宮島学センターという世界遺産の厳島の研究を、歴史・文化、さまざまな角度から研究をしているセンターがあるのですが、教育面での取組を全体会で発表し、意見交換を致しました。午後はポスターセッションで高等学校・大学相互の情報共有・意見交換をしたところです。

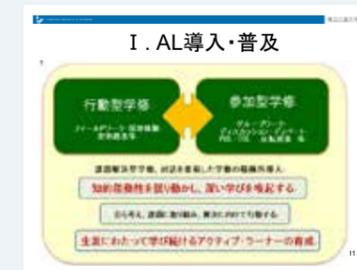
宮島学の話をもっと詳しく言うと、宮島学センターは、学術研究また地域貢献の場でもあるのですが、そこで得られたものを学生教育にも生かしていこうというセンターです。2年前から、宮島観光学入門（英語）というものをスタートしまして、いろいろな文化・歴史の研究成果を発信する、しかもそれを英語の授業という形で取り組みを始めているところです。もともとこれは授業科目ではなくて、課外講座として行っていたのですが、学生が調査した内容を英語にして自分でガイド資料を作ったり、実際に現地に出かけて行って練習をしたりして、自分たちの学んだことを英語で伝える「ガイド実習」というかたちにして、行動型学修と参加型学修が全部入っているというような授業にしていきました。その中に、宮島学センターが蓄積してきた学術研究あるいは地域貢献の要素を加味して、ひとつの授業モデルとしているところです。

今年度、県下高等学校のテーマはカリキュラムマネジメントの目標をどのように立てていくか、というところでしたので、宮島学センターがこういった研究活動や地域貢献活動をどのように大学のカリキュラムの中に組み込んでいっているのか、ということを高等学校の先生方にもご紹介・意見交換をしましたところ、早速高等学校からぜひ連携したい、フィールドワークを見学させてくれないか、というきっかけが生まれてきています。

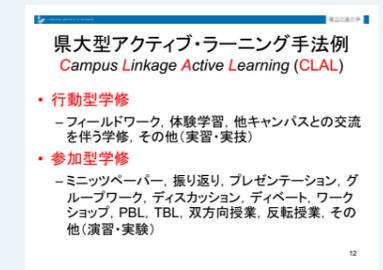
[28~31] 県立広島大学では教育改革フォーラムというのを毎年年度末に行っております。それを県内大学コンソーシアムの高大連携研究交流会を兼ね、高大接続をしばらくテーマとしてやってきました。このイベントは県内外の大学の関係者、それから県内の高等学校の関係者にも集まって頂いて毎年200名程の



[10]



[11]



[12]

AL実施状況

- 平成29年度904科目中、833科目で実施 **92.1%** (平成26年度 66.9%)
- 833科目中、560科目(約3分の2)は、**300分間**(1コマ90分あたり20分間)以上のALを実施

[13]

AL実施状況 (科目別)

学修形態	科目数	割合
講義	484	58%
演習	87	10%
実習	12	1%
実務経験	1	0%
卒業研究	1	0%
その他	138	16%
合計	833	100%

[14]

ALer自己評価ルーブリックによる効果

項目	実施前 (%)	実施後 (%)
主体的な学びの促進	65	85
深い学びの促進	55	75
知識の習得	75	85
実践力の向上	45	65
コミュニケーション能力の向上	55	75
自己管理能力の向上	45	65
社会貢献意識の向上	35	55

[15]

- II. FDerの養成
- 組織的教育改善
 - カリキュラム改善への提言
 - AL実践と普及
 - 授業ピアレビュー、高校授業参観
 - 学修成果の把握
 - ALer自己評価ルーブリック作成
 - SAとの協働
 - 学生による学修支援をサポート

[16]

役割別FDer数

	広島	庄原	三原
1) 組織的教育改善	5	4	3
2) AL実践と普及	7	5	8
3) 学修成果の把握	7	3	7
4) 学修支援アドバイザーとの協働	6	3	8

[17]

FDer自己評価ルーブリック

項目	達成率 (%)
主体的な学びの促進	85
深い学びの促進	75
知識の習得	85
実践力の向上	65
コミュニケーション能力の向上	75
自己管理能力の向上	65
社会貢献意識の向上	55

[18]

- FDer(教員), SA(学生)
- FDer:** 担当授業等においてアクティブ・ラーニングを**実践**し、学科内の他の教員へアクティブ・ラーニングに関する**指導・助言**を行うとともに、本学における**アクティブ・ラーニングの普及・浸透**に努める
 - SA:** 授業内外において本学学生への学修支援を行う学生であり、**他者の学びを支援**すること等を通じて、**自身が学ぶ喜びを感じ**、生涯学び続ける**アクティブ・ラーナー**を目指す

[19]

III. SAの養成(H30前期)

	広島	庄原	三原	合計	基準 (20名)
活動人数(1名以上)	6	11	20	37	47
ALer自己評価ルーブリック	3	7	10	20	20
授業ピアレビュー	3	6	10	19	20
授業支援アドバイザー	3	6	6	15	—
合計	15	30	36	81	117
ALer自己評価ルーブリック	12	10	6	28	20
授業ピアレビュー	3	6	10	19	20
授業支援アドバイザー	6	14	6	26	—

[20]

授業参観シートを用いたピアレビュー

項目	評価
授業内容	5.0
授業方法	4.5
授業態度	4.5
授業環境	4.5
授業時間	4.5
授業評価	4.5

[21]

IV. 学修成果の可視化

ALer自己評価ルーブリック(試行版)

項目	達成率 (%)
主体的な学びの促進	85
深い学びの促進	75
知識の習得	85
実践力の向上	65
コミュニケーション能力の向上	75
自己管理能力の向上	65
社会貢献意識の向上	55

[22]



[23]



[24]

規模のフォーラムとしてやっています。今年は3月8日に「生涯学び続ける自立的な学修者の育成―教員・職員・学生の役割―」という講演を含むフォーラムを、「アクティブ・ラーナー育成に向けた『教・職・学』の協働」というテーマで高大連携の研究会を兼ねて実施しますので、お時間があればぜひお寄りください。そのほかにも全学FD研修会という形で、広島県の教育委員会ですべてリードしてきた方々、たとえば中高一貫の県立広島中学高校の校長を長年務めた方や、元教育長に話をしています。

また授業のピアレビューについて、新任教員の授業公開という仕組みはありましたが、それをどう次に生かすか充分ではなかった反省があります。そこで昨年度教授として招いた前教育センター副所長が授業改善について中等教育で取り組んでいることを紹介し、それを大学にどのように応用できるかという研修をしました。それが現在行っているFDer間の授業ピアレビューとして教員・職員・学生に広がって行ってます。また、今私たちは高等学校にもできるだけ出掛けて授業を見せて頂くようになりました。そういったようなことを高大接続という枠組みで何ができるか、高等学校から色々と学ぶ機会を重ねているといった状況です。

[32] また、高校と大学の教員が交流する機会を設けるようになったことから新たな連携も生まれつつあります。県内で多く発生しているイノシシ被害に対し、大学が地域課題解決研究として何かできないかと模索をしてきた中で、「超音波を利用してイノシシを一扫する」という特許を取りました。イノシシが農作物を荒らすという事に対して何とか対策を打っているのですが、やはり個体数を減らさないといけないので殺処分が必要です。しかしそのまま埋設処理するのではなく、骨を活用したり、脂身を活用したりできないか、ということでイノシシ肉を利用するハンバーグ作りという研究をSPH（スーパー・プロフェッショナル・ハイスクール）指定校である庄原実業高校というところと連携しながらやっています。そういった研究成果から得られたものを、高校生、あるいは高校の先生方と協議しながら、実際にこうやってハンバーグ作りをして試食会を行って、それを実際に商品化できないかという事を考えています。

[33,34] 教・職・学の協働といったところで、ちょっとだけご紹介したいと思いますが、授業のピアレビューを通じて、学生も交えて職員も交えて議論をする場というものを持つようになりました。そこで、教員と職員と学生が一緒になって議論できる教育改善のテーマを掲げたミーティングを各キャンパスで開きました。職員も教員も学生も参加するかたちで教職学ミーティング、教育改革ミーティングと呼んで行いましたが、グループワークを展開しながら意見を聞いて、我々も学生の意見や職員の意見を聞いてはっとさせられる事がたくさんありました。我々としてはこういう思いでやっているのだけでも、それが本当に学生に伝わっているのか、学生の視点から見たときに、ここはこういう風にしたら良くなるのではないかと、そのような意見交換を各キャンパスで行ったところです。3月8日の教育改革フォーラムでは、各キャンパスの学生も登壇して意見を述べる機会を設けようと準備をしています。

[35] こういった教・職・学の協働が、今まで取り組んできたこ

とをさらに補強するという思いで今やっています。アクティブ・ラーナー育成を目指す取り組みとして、もともと3本柱でスタートしていったところに4と5と加えることによって、さらに広がり・深みが増していった印象を持っています。そしてそれを補強する意味で、今6番目の教・職・学の協働といったところに力を注いでいますが、今日は、高大接続改革というところで私たちが何をすればいいのか、広島県教育委員会と県立広島大学がどのように連携をとり、どうかたちで今進めているかをご紹介いたしました。

[36] 最後に、高大接続が我々の大学教育改革とどのように結びついていくのか、それをこれからどうやって大学をよりよくするのか、そしてそれは双方にとって良いものとするために何が課題なのかをまとめますと、入試だけでなく、人材育成という点で接続を考えることがどうしても必要となってくるだろうと思います。それから私たちは高等学校との取り組みから非常に多くの事を学んでいます。アクティブ・ラーニングとは一体どういうものなのか。主体的な学び、深い学び、対話的な学びとはどういうものなのか。大学に入ってくる前に受けた教育について、指導内容だけでなく、どんな生徒が入学して来るのかを学ぶという、新しい学びの姿を模索するための連携は非常に重要であると考えています。

さきほど大学の研究の成果について触れましたが、大学ならではの、あるいは高校ならではの強みをしっかりと相互に関連させていくことが重要だと思います。そしてそれを実現するためにも、高校・大学・教職員間の交流の機会をいろいろな形で模索していく必要があると思います。今考えていますのは、大学生と高校生の交流の機会をもっともっと拡大していきたいということです。学修支援アドバイザーのしくみ、今は我々の先輩学生が後輩学生に行っていますけども、これは高校生に対してもかわりを持つことでますます広がりを見せていくことができるのではないかと。そういう可能性をさらに模索をしていきたいと考えています。

今日は私たちがAP事業の中でどのような取り組みをして、そして高大接続をどのように考えていったかご紹介をさせていただきました。また後程忌憚のないご意見を頂戴できればと思います。どうもありがとうございました。

「高大接続」の歩み①

広島県の学びの変革に係る説明・意見交換会

- 2016年11月21日

・広島版「学びの変革」アクションプラン
<https://www.pref.hiroshima.lg.jp/uploaded/attachment/150031.pdf>

[25]

「高大接続」の歩み②

広島県高等学校 教育研究・実践合同発表会

2017年より、毎年開催。全体会での報告、各学科等の組織的教育改善ポスターセッション

- 2019年1月25日 パネルディスカッション
 「育てたい資質・能力」からカリキュラム・マネジメントを考える
 県立広島大学「『宮島学』で学びを深める」

[26]

「高大接続」の歩み③

全学共通教育「宮島観光学入門(英語)」を例として

【授業の目標】
 宮島の歴史や文化に関する基礎知識を身につけ、学生が自ら宮島の魅力を発見し、現場でのガイド実践において、自分のことばで説明することを目指す。

【カリキュラム上の位置づけ】
 全学共通教育科目「広島と世界」

【授業の内容】
 宮島の歴史や文化について体系的な視点で学び、英語で分かりやすく案内できる方法を学ぶ。
 宮島の歴史や文化に関する基礎知識の習得。 ― 参加型
 ガイド実践やツールの作成
 フィールドワークで外国人観光客に対するガイドの技術を体験。 ― 行動型
 後半…バーチャルガイドとディスカッションで自信力の向上を目指す。 ― 参加型
 ガイド実践でガイドを通して外国人観光客と交流する力を養う。 ― 行動型

[27]

「高大接続」の歩み③

県立広島大学教育改革フォーラム

2017年より、教育ネットワーク中国「高大連携研究交流会」を兼ねて実施

- 2017年3月3日
 「高等学校におけるアクティブ・ラーニングと高大接続改革」
 (前広島県立西条農業高等学校長)

[28]

「高大接続」の歩み③

- 2018年3月8日
 「高大接続改革とアクティブ・ラーニング：その背景と今後の方向性について」
- 2019年3月8日
 「生涯学び続ける自立的な学修者の育成 ― 教員・職員・学生の役割 ―」

[29]

「高大接続」の歩み④

全学FD研修会

- 2017年6月21日
 「学びの変革を支える学校づくり」
 (前広島県立広島中学校・広島高等学校長)
- 2018年6月25日
 「高大接続の観点からみた大学教育改革」
 (前広島県教育委員会教育長)

[30]

「高大接続」の歩み⑤

FDer養成講座

- 2017年6月28日(広島)、6月30日(庄原) 7月4日(三原)

「授業の見方について考える」
 (前広島県立教育センター副所長)

- ⇒ FDer間授業ピアレビュー
- ⇒ 高等学校授業参観

[31]

高等学校との連携事例
 イノシシ肉を利用するハンバーグ作り

- イノシシによる農作物被害
- 殺処分される個体の存在、埋設処理
- 廃棄される部位のない活用方法を調査研究
- 骨の活用(老犬用口臭予防のための骨)
- 脂身の活用(木質ペレット)
- 肉を利用するハンバーグ作り

[32]

VI. 教職学の協働

「教・職・学」協働による教育改革
 ミーティング(教職学MTG)

部 会	実施日	教員	職員	学生	計
広島キャンパス	10月10日(水)	6人	6人	4人	16人(4部)
庄原キャンパス	10月19日(金)	7人	3人	9人	19人(3部)
三原キャンパス	10月25日(木)	7人	3人	10人	20人(3部)
計		20人	12人	23人	55人(10部)

[33]

課題の抽出 → 協働へ

実施日	場 所	出席者(出席者数)
10月10日	広島キャンパス	16名(16名)
10月19日	庄原キャンパス	19名(19名)
10月25日	三原キャンパス	20名(20名)
11月10日	広島キャンパス	16名(16名)
11月19日	庄原キャンパス	19名(19名)
11月25日	三原キャンパス	20名(20名)
12月10日	広島キャンパス	16名(16名)
12月19日	庄原キャンパス	19名(19名)
12月25日	三原キャンパス	20名(20名)

[34]

ALer育成を目指す取り組み

- I. アクティブ・ラーニング(AL)導入・普及
- II. ファカルティ・ディベロッパー(FDer)養成
- III. 学修支援アドバイザー(SA)養成
- IV. 学修成果の可視化
- V. 高大接続改革の推進
- VI. 教員・職員・学生(教職学)の協働

[35]

高大接続と大学教育改革

- ・人材育成のための「接続」
- ・学びの新しい姿を模索する「連携」
- ・「大学ならではの」「高校ならではの」のリソース
- ・「高・大」教職員間の交流機会
- ・大学生と高校生の交流機会拡大へ

[36]

基調講演 2

高崎経済大学「高大コラボゼミ」の成果と課題

高崎経済大学 経済学部 教授 矢野 修一 氏



[1] 高崎経済大学の矢野と申します。本日は高崎経済大学の高大コラボゼミについて簡単に紹介させて頂き、本日のテーマである探究型学修へのヒントにして頂ければと考えております。どうしても急ぎ足になりますので、お手元に何年前に話した事を文章化したもの、あるいは今年度の高大コラボゼミの成果報告書に書きましたものをコピーしてお渡ししておりますので、もし何か振り返られることがあれば、そちらの方でご確認して頂ければと思います。

[2] 今日のメインは「高経大+高経附『高大コラボゼミ』～日本企業の海外戦略の研究～」というところになります。これは高経大・高経附の教員同士、学生・生徒が協力しながら統一的なテーマを掲げ、ゼミナール形式の少人数グループ学習を進めるプログラムです。

高大コラボゼミは2010年度から実施しまして、来年度で10年目を迎えるプログラムです。「日本企業の海外戦略の研究」をテーマとし高校生と一緒にゼミをやって参りました。2014年度から、高崎経済大学附属高校がスーパーグローバルハイスクール（SGH）に指定されていますが、その中心的なプログラムとなっています。

[3] それぞれの大学・高校について若干説明しておきますと、高崎経済大学は1957年に高崎市が経済学部経済学科の単科大学として設置しました。その後経営学科、地域政策学部、大学院が設置され、2011年に法人化して今に至ります。創立以来、全国型公立大学としての特性を持っており、高崎はもちろん、札幌、仙台、東京、金沢、名古屋、大阪、岡山、福岡と全国各地で入試をしています。創立以来全国各地から学生を集める大学となっております。特に経済学部は中期日程で定員の半分を占めるため、現在7割以上の学生が県外出身者となっております。

[4] 次に高崎市立高崎経済大学附属高校ですが、これは本学以上に歴史ある市立の女子高校を母体としています。1994年、高崎市立女子高校に大学附属と名前を付けて共学化した高校で、1学年280人、普通科普通コース7クラス、芸術コース1クラスとなっています。普通科は現在、文系理系とも各学年1クラスずつオナークラスというのがありまして、総合学習の時間を利用して教室を飛び出しているいろいろなことを学ぶ時間があります。高大コラボゼミは、現在は高校2年生の2年1組、それから文系の3年1組、ここが私どもの大学の学生と一緒にゼミをやるというかたちとなっております。

両校は自転車で20分ほどの距離がありますが、高校生にとって教室を飛び出す、あるいは若干の緊張感をもって学んでもらいたいという事で、高大コラボゼミの会場はあえて大学にしております。自転車で来る人もいれば、高校のバスを使って来る子もいます。

[5] 大学と附属高校の連携について紹介させて頂きます。本学には「日本語リテラシー」という必修授業がありますが、これを履修した大学生が附属高校に出向いて高校1年生の作文指導をする、ということをしております。それから、附属高校2年生に対する高大コラボゼミⅠですがこれは文系のオナークラスが対象で、日経新聞主催のストックリーグというコンテストに参加します。これは社会をどう変えていけるかというような観点で投資企業を選び、プレゼン内容を競うものです。日経新聞に全面広告が出るような結構大掛かりな全国コンテストです。参加するのは高校生ですが、大学生は自分たちが出場するだけではなく、高校生を支援します。今日主にお話するのは、附属高校3年文系オナークラスが取り組む高大コラボゼミⅡにおける、私のゼミの大学3年生との共同企業研究についてです。

[6] そもそも高大連携・接続がなぜ推進されているかという背景として、皆さんご承知かと思いますが、もはや大学は選ばなければ全員が入れる時代がやってきており、大学全入時代といわれています。その大学全入時代において、大学中退者が年間約8万人。2014年9月の文科省発表によれば79311人がせっかく入った大学を中退しています。また大卒ニートが3万人。高等教育を受けて大学卒業して、ニート。つまりその後学ぶ場所にいるわけなし、働いているわけでもなし、こういう状況にあります。

この数字の裏でどうなっているかという、高校では偏差値に応じて大学に割り振りして送り出し、入れたら終わりとなる。大学も入試でなるべく偏差値高い子を入れて、こちらに入れてしまえば終わりとなっている。なんだか偏差値別に大学に押し込められた生徒が、学ぶ目的もなく何のために進学したかも考えないでダラダラ過ごしているうちに、面白くなくなって辞めてしまうという状況が生じているのではないかと思います。この数字は年によって持ち直すこともありますが、大体はこの数字で間違いないと思います。しかしこれは日本にとっては非常に損失です。国公立私立問わず、税金が高等教育に投入されている中でニートを3万人毎年生み出している。個人としても決して安くはない授業料を払っているのに中退してしまう。個人的にも社会的にも決して安くはない

投資が全然報われていない状況は、高校・大学教育に関わる人だけでなく、文科省にとっても非常に大きな課題になるわけで、教育内容をちゃんと見直しましょう、連携どうしましょう、高大接続・初年次教育、そもそも学力が追い付かない人にリメディアル教育をどうしましょう、ということが大きな課題になってきたのだと思います。

[7] 先ほど馬本先生にいろんな試みを紹介して頂きましたが、我々はゼミという形式が高大連携に関してもうまく使えるのではないかと考えました。船曳建夫さんという東大の駒場で伝説的なゼミを展開した先生がおられますが、彼の本によれば、「ゼミは最も大学らしい『知の形式』である」とおっしゃられています。一人一人が問題意識を持ってみんなの前で問題を提議する。そしてそれを議論する。その論理的な展開の中に喜びを感じる。これこそが大学だ、というような主旨の発言をされています。

[8] ゼミという学ぶ形式が有する可能性を、高大連携においても利用できないだろうかというのがこの試みの中心にあります。つまり、高校の教室で座っているだけ、一方通行で聞くだけ、伝えるのは国の検定教科書だけ、それだけでは当然学べないような事を、このコラボゼミで学べるのではないかと。一人だけではなく、皆で色々議論していく中で、一人では到達できなかった真理に達することができるのではないかと。

高校生や大学生には、高大コラボゼミの意味とか意義とかをお話しする時に「早く行きたければ一人で行け。遠くまで行きたければ皆で行け」という言葉をよく使います。一人で勉強した方が、効率よく知識も身につくし、覚えるのが遅いやつと一緒に議論してどうなるのかという人がいるのですが、一人では学べないことをゼミで学べる事があるんだよ、と言って巻き込んでいます。年齢の違う生徒・学生が教室の一方的な座学から離れて、協力しながら具体的課題に取り組む、そうしていく中で社会人基礎力とか学士力だとかが専門的知識とともについてくる。そして、やり取りをしようと思えば、話し合い、情報の共有・交換、質問、説得のためのエビデンスを示さないといけな、ということが分かります。

[9] また、コラボゼミに取り組めば知識もつくけれど、それが例えば小論文書くときに役立ったりします。あるいは後で紹介するように、英語も使いますので英語の勉強にもなります。この高大コラボゼミでは、教室外で良き大人と出会い、教科書だけでは学べないような新たな見方と出会います。そしていろいろな事に取り組

む中で、自分が勝手に狭く設定していた進路の選択肢を広げたり、高校で学んだだけでは考えなかったような新たな可能性を見出したりするかもしれない。こういう趣旨でコラボゼミを運営しています。高校の段階から、自分はなぜ学ぶのか、何で大学に行くのか、大学に行ってどうしたいのかということを考えるチャンスがあるという事は、非常にいいことではないかなと思います。

[10~16] このコラボゼミがきっかけになってSGHに認定されたわけですが、概略を説明いたします。テーマは日本企業の海外戦略、グローバル人材に必要な能力と指標の開発という事で採択されましたが、高校3年生とのコラボゼミは2010年度からやっておりました。これを、どうやって3年間にわたるものにしてゆこうかと考えたときに、1年生の時に、高崎市内の企業の海外進出等の現状と課題を意識させることによって、経済が海外と繋がっている、高崎が海外と繋がっている、自分はそこに住んでいるということを意識させることにしました。2年生はさきほど申し上げたストックリーグを使い、3年生は実際に企業に訪問してインタビューをする。このような仕組みでやっていきました。

[17] ここまで高校側の話をしましたが、では大学生側、一緒にやっていく私のゼミの3年生はどういう状況なのかを申し上げます。高崎経済大学経済学部は2年後期の基礎演習、3年の演習Ⅰ、4年の演習Ⅱという事で2年半のゼミが必修です。3年生の段階では基礎演習が終わっています。3年生では原書を含めた専門書、後ほど紹介する就活文庫というものを読んでいます。正式な時間割は金曜の4時間目、延長があったり自主ゼミがあったりするのですが、演習Ⅰからゼミ活動は本格化していきます。高大コラボゼミとは言え、サボリ癖のついた学生と高校生が連携しても高校生に対して失礼です。やはり大学生の方も、ある程度ゼミというものをどういうものか、そこで何を学ぶのか意識を高く持つ人たちに来てもらいたいということで、このようなことに取り組んでいます。

[18] 先ほど紹介した就活文庫ですけども、要は読書の癖をつけてもらいたいという事で、2年の後期に15冊、3年の前期に15冊、1冊ずつ読書ノートをつけながら毎週回して読んでいます。先生方もご存じだと思うのですが、大学生協連が2017年度調べた調査では、読書時間ゼロ学生がなんと53.1%もいたんですね。文系よりも理系、男子よりも女子、高学年よりも低学年で本を読んでいない。我がゼミも似たようなものですので、まず読む癖を

つけて頂きたいという事で3年次の高大コラボゼミに備えても
らっています。

[19] ここからは具体的方法論になりますが、まず3年1組の40
名位を6分割し、私のゼミの15名位を6分割し、高校生と大学生
を1チームにします。1グループ高校生6〜7名、大学生2〜3
名で毎年6つの企業のケーススタディをします。コラボゼミで期
待されているのは、教室外での学びの体験が、教室内での学習意
欲の向上に繋がるというところです。

[20~26] なぜ自分が今英語を勉強しているのか、なぜ現代史、古
文・漢文というのを学んでいるのか、なぜグローバル人材なのか。
企業にインタビューしていると、「自国の文化もわからずに、グ
ローバル人材なんてあり得ないでしょ」と指摘され、古文漢文で
寝ていた連中がはっと起きたりします。また本社インタビューに
行くと、英語なんか必要条件だと普通に言われたりするわけで、
そうすると高校の教室内での学び方が変わってきます。要はレベ
ルが上がると、見える景色が違ってくる感じになるわけです。で

は大学生側はどうだろうという、教えることによって学んでい
きます。例えば日本企業の海外戦略がどうだ、為替レートがどう
変動するか、新興国の状況は今こうなっている、ということを高
校生と話し合おうとしていたとして、実際質問されたときに大学
生が答えようとするれば、その事象に関して十分に理解してい
ないとダメだし、高校生でも分かるような言葉で語らないとダメだ
という事が分かります。つまり、ある事象に対して理解がないと、十
分自分が知ってないとダメだということに気づくわけです。そし

て指導教員の私から「お前らこのままやと恥かくぞ。高校生が来
てんのに、聞かれたこと全然答えられへんなんて恥かくぞ」など
と言われると、恥はかきたくないと彼らも思うので準備をちゃん
とします。ジョセフ・ジュベールというフランスのモラリストが
「教えることは二度学ぶことである」と言っていますが、学生にも
高校生にもこれを言います。分からない事があったら聞けばいい
んだよ、あるいは、聞かれたら教えてあげればいいんだよとい
うことが積み重なっていくと、受験にもつながるわけです。

こうして、1年生で高崎の中小企業の経営のいろんなあり方を学
び、2年生のストックリーグでポートフォリオを自分たちの視点
で作成し、3年生は毎年日本を代表する6企業の海外戦略を研究
し、実際に東京本社に訪問し、インタビューする。そしてそれを、何
百人もの前で成果発表を行うというプログラムになっています。

[27] さて、対象となる企業ですが、選ぶのは大変ですし、そもそ
も受け入れて頂くのが難しいです。表玄関から行って広報担当に
電話しても門前払いを食らいます。そこで2年目までは私の個人
的な人脈、つまり大学の同級生、先輩、後輩の伝手をたどりまし
た。しかし2年目までやってみて自分の人脈だけでは限界がある
と感じ、3年目以降は社会貢献を目指す企業OB組織のNPO法人
に依頼をして進めました。ここには自分の今まで仕事をしてきた
ことを、社会に役立てたいって思っておられる方がいっぱい
います。現在の日本では、CSRに取り組む企業は大企業・中小企業
に関わらず存在します。また業界団体、各種経済団体、NPOな
どが教育を含め社会貢献活動に積極的であるので、その相手をう
まく探すことが大事ではないかと思えます。経済をテーマに高大

連携をしていくときに現役の教職員だけでやっていこうとして
も無理がありますので、外部をうまく使うということです。高大
連携と言いつつ、実は「高・大・産」連携なんですね。産業界を
巻き込んでいってうまくやる。また、「老」と書くと後ろから殴ら
れそうですが「高・大・産・老」として、企業のOBOGだけじゃ
なくて、大学の先生も高校の先生も現役の先生はむちゃくちゃ忙
しいので、定年退職された方を再任用というかたちで、高大連携
を担当される方をうまく活用してはどうか。その時に「老」の中
には例えば高校の卒業生名簿かなんかで、近所で社長をやってい
るとか、二代目に引き継いでいるぞとか、そういったことを確認
しながらうまく連携していくのが大事なのではないかと思えます。

外部とうまく繋がることで、一番大きな問題である、中退者8万
人・ニート3万人をどうするか、高校・大学の段階でキャリア意
識をどういう風に育むかということのヒントを得ようというわ
けです。

[28] 来年度のスケジュールですが2月19日、つまり明日新3年
1組に私が行って話をします。その後、全体会合を8回やります
が、これはすべて大学に来てもらってやります。また企業訪問の前
に各グループで集まり、それらを経て8月9日に企業訪問を行
います。なお、成果発表会は公開しておりますので、もし、今日お話
を聞かれて行ってみたいと思われましたら、9月21日午後から
ですのでぜひお越しください。

[29,30] コラボゼミの3本柱なんですけども、1つは日経新聞の
円ダービーに参加をして、為替レートの研究をするということ、2
つ目は企業研究・企業訪問ですがいま申し上げたとおり、3つ目
は英検・TOEICということになります。メインは先ほど紹介し
た企業研究・企業訪問となります。英検・TOEICについては、附
属高校では、1年次から英検を全員受験させています。先ほど申し
上げましたように、日本企業の海外戦略を研究し、インタビュー
していると、英語が必要条件になるということは一ひしひしと伝わ
てきますので、学生も積極的に勉強します。

[31] 日経新聞円ダービーの参加ですが、これは4月〜6月の円
ドルレートを予想する学生対抗戦というのが2001年以来開催
されています。これに参加することによってまずは国内外の政治
経済ニュースに着目する癖をつけてもらい、現実の経済に関心
を持つきっかけにしています。そしてこれを一人でなくて、みな
で予想することによってグループ学習のスタートにしてもらう。
その時に「じゃ、1ドル190円30銭。」「何で?」「女のカンよ」と
いうことではなく、エビデンスをもって話をしてもらいます。何
でそうなるのか、根拠を出し合うという癖をつけてもらうこと
になるわけです。

[32~38] 企業研究・企業訪問については、各企業の沿革、経営
戦略、同業他社の状況、世界市場の動向等を、様々なツールを活
用して研究します。大学生が、高校生に適切な課題を提供し、次
回に色々発表し議論したりすることを通じて、8月の企業訪問に
備えます。また、中間発表会を時々行いますが、その中では研究
内容を英語でプレゼンテーションしてもらって留学生との間で
色々やり取りをしてもらうこともあります。さらに、企業研究・
企業訪問の中で注意したいのは服装・髪型・髪色等、社会人とし

ての身だしなみについてです。これは日頃のコラボゼミから
注意しています。

[39~52] 最後の成果発表会は総合学習の時間を使ってプレ
ゼンの準備をしていくわけですが、大学生が高校に出向いて、
パワポの資料作り等々を手伝ったりリハーサルをしたりして
います。冒頭の英語スピーチから発表、フロアでの質疑応答
まで高校生は堂々とこなします。来賓は企業OBとかもいて、
講評をしてもらったりもするわけですけども、この発表会終
了後は高校生・大学生とも安堵感・達成感からほっとして、
泣き出す子たちもいます。一生懸命取り組んでここまで出来
たってというような感じで、涙が出るということです。そういう
細かい部分についてはお渡しした別冊の資料で確認して頂
ければと思います。

高大コラボゼミのキャリア教育へのヒントということですが、
一定の効果はあると思います。自信、自己肯定感の低い若者が、
小さなチャレンジに成功したり失敗したりする中で、高校生と
大学と一緒に、また大人が関わりながらやっていくと、得られ
るものも多いだろうと思います。

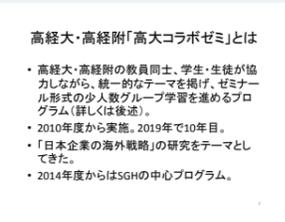
[53] 今後の課題ですが、企業の研究をしていく中で、批判
的な視点っていうものをなくしてしまって、企業の戦略とか人の
苦労とか見せすぎると、どうも企業の広報役で終わってしまう
危険性があります。実際にそのような報告もたまにあります。
それから、SGH終了後の予算措置、これは高崎市に頑張っても
らおうと思っています。高校の通常授業との両立可能性、これ
は一粒で何度もおいしいと言いましたけれど、まだまだ課題が
多いです。それから高大連携ですが、高校・大学ともにどれだ
け多くの教職員を巻き込めるかということです。まだまだ全員
体制になってない。先ほどの馬本先生の話だと、結構色々な方
を巻き込んで、大規模なことになっているようですけども、高
崎経済大学との附属高校との場合にはまだそこまでいってな
いという風に考えています。

[54~58] まとめになりますが、高大コラボゼミによって「教
えることによって学ぶ」ということは先ほど申し上げたとおり
です。それから高大連携としては、高校と大学それぞれの教育課
題への相互理解に結びついています。高校側の先生は大学教育
へ、大学の先生は高校教育への理解を深めるきっかけにはなっ
ているだろうと思います。最後に、教室外での生徒学生のやり
取りから、教員が教室内で見落としていた能力を発見する事
があります。どうしても教室内だと、テストが点数とれるとか、良
い子に目が向きがちですが、高校生・大学生の勉強している様
子を見ていくと、意外とこんな事ができるのかとか、こんな言
葉づかいができるのかとか、そういう、個々人の多様な能力の
評価軸を発見できたりもするのがこの高大コラボゼミのひとつ
の成果かなと思っております。最後急ぎ足になってしまいま
したが、抜けている部分は文章化した資料でもって補っていただ
ければと思っております。

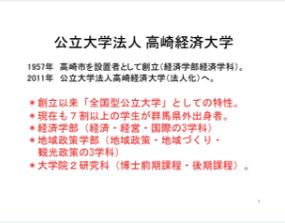
ご清聴ありがとうございました。



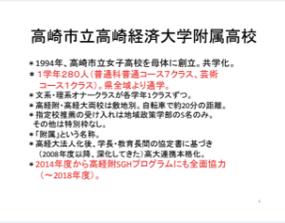
[1]



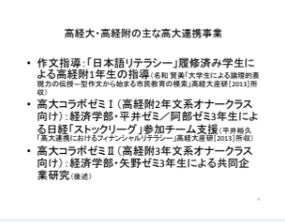
[2]



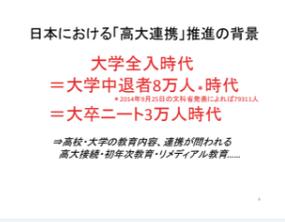
[3]



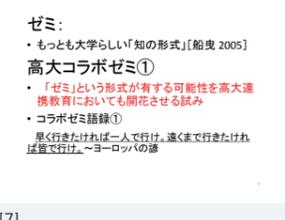
[4]



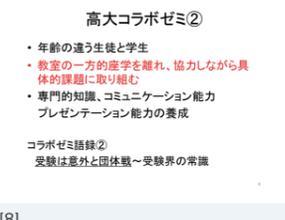
[5]



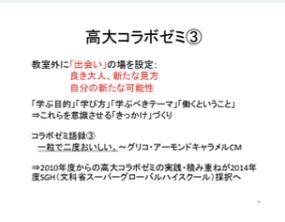
[6]



[7]



[8]



[9]



[10]

宮城大学の高大連携の取組紹介

宮城大学 基盤教育群長兼食産業学群 教授 川村 保



- [1] 基盤教育群長の川村です。ここでは少々時間を頂きまして本学の高大連携の取組について御紹介させていただきたいと思ひます。
- [2] 宮城大学は公立大学でございますので、高大連携で目指しているものとして、高校生あるいは地域社会の皆さんにとって、身近な大学になっていくという目標がございます。その上で、大学だから大学だけで大学の教育を、ということではなくて、高等学校と大学、生徒に携わる教員が相互の教育を理解しながら指導力を高めることで地域貢献できる人材を育てていきたいと考えます。
- [3] これは宮城大学が目指している高大連携のイメージ図でございますけれども、従前の高大連携は、大学の先生が高校に出向いて、あるいは高校生が大学に出向いて見学したり授業を受けたりというような事が中心でした。このような従来型の取り組みから、アカデミック・インターンシップを中心とした取組に変えてきており、大学教員、高校生、大学生、それから高校の先生方にも参加して頂きながら進めています。言い換えれば、どちらから一方向の働きかけではなく、双方交わる形での展開を考えているところでございまして、本日、このシンポジウムでは「探究型学習」という言葉をキーワードに、皆さま方との討論を通じてよりレベルの高い高大連携を進めていきたいと考えております。
- [4] 宮城大学の高大連携は大きくこの4つで進めているところでございます。1つ目に出前講義あるいは大学の見学ということでの高校生の進学支援の活動になります。2つ目に大学の学びを体験してもらう、それが進学の動機づけになる、こういったことを目指すものとしてアカデミック・インターンシップを実施しております。それから3番目としましては「総合的な学習（探究）の時間」のための指導支援をやっています。最後に、探究型学習を充実させるための高校の先生方向けの研修会でございます。ひとつずつ簡単にご紹介していきます。
- [5] 出前講義は平成13年度から実施しておりますが、大学での学びを経験してもらうということで高校単位でご依頼頂いて、年間だいたい30件程度教員派遣を行っております。今年度は延べ1600人ほどの生徒さんに受講いただきました。
- [6] 大学見学は平成17年度から実施しておりますけれども、大学の授業あるいは大学の講義の施設、大学の講義の様子を見て頂くという取組で、年間大体20件程度でございます。今年度は延べ460人ほどの生徒さんにお越し頂きました。
- [7] 続きましてアカデミック・インターンシップです。こちらは平

- 成23年度からスタートしておりますけれども、大学の授業を体験することを通じて、宮城大学で学ぶことの魅力や、学問の深さ・探究心を養ってもらってこの後の進学につなげていってもらう、このようなことを期待しているところです。また、講義を聴くだけではなくて、フィールドに出て先生方あるいは大学生から色々な話を聞いたり、あるいは活動を行ったりというようなことも行っています。
- [8] これは平成30年度のプログラムですが、第1日目のプログラムということでは、基盤教育群のプログラムを中心としまして、体育「高校時代からの科学的な健康・体力づくり」それから数学「この橋、渡ら『ざる』べからず」ということでの2つの講義を実施しました。2日目は看護・事業プランニング・地域創生・価値創造・食資源開発・フードマネジメント、宮城大学の各専門領域を学んで頂くような、こういったプログラムを予定していました。残念ながら今年度は2日目に台風が直撃して中止となってしまいましたが、このような学びの機会を設定しているのがアカデミック・インターンシップでございます。
- [9] 次に平成28年度から行っている活動ですけれども、「総合的な探究の時間」の内容充実のための探究型学習の指導支援ということで、これは大学の教員が高校に出向きまして、研究課題の設定ですとか、あるいは発表の仕方、あるいは途中の分析の仕方といったようなことについて指導助言を行っています。これは高校側からお話を頂いて実施するわけですが、なかなかこれは準備を要するので、お話を頂いた高校ごとケースバイケースで支援させて頂いております。
- [10] 最後に探究型学習を充実させるための高校教員向けの研修会の実施ですが、これは今年度からの取り組みでございます。ひとつ前のところで、探究型学習支援のお話をしましたけれども、今後我々が高校にお伺いできる人数にも限りがありますので、高校の先生方にこういう研修会をとしまして私共の大学のもっているノウハウを吸収していただいて、それを基にして高校それぞれが独自に探究型学習を進めて頂きたいと考えているところでございます。今年度は、富谷高校様、山形北高校様からお話を頂きまして、高校に出向きまして、研修会を数回、意見交換会、こういったようなことを実施させて頂いております。本日の会場に山形北高等学校様から御参加を頂いておりますので、少しコメント頂ければと思いますが、お願いできますでしょうか。

- 山形北高等学校コメント
山形北高等学校です。本校では、総合の時間に、地域課題解決型の学習ということで探究が始まりました。探究委員会という事務局の先生方4名が中心となって進めておりますが、どうしても全職員でやらねばならないので、川村先生にお越し頂きましてご講演頂きました。個人的な感想ですが、先生方の目線が揃ったといひますか、どのようにやらなければいけないのかということが非常に勉強になったと感じております。今年度も地域の課題について生徒たちで研究をしてもらって、課題解決のレポートまで提出して初年度を終えたところで、次年度に向けてこれから考えていきたいと思っております。どうもありがとうございました。

- [11] ありがとうございます。最初のスライドに戻りますが、徐々に高校生・大学生の矢印、あるいは高校の先生、大学教員の矢印を太くしていき、さらにアカデミック・インターンシップというものを、さらに探究型学習を中心としたものへと発展させていくということで、将来的により充実した高大連携というものを目指していきたいと考えております。とても先導している両大学のようなところまで行きつくにはまだまだ私共力不足でありますけれども、目指すところはおそらく、考えていることは同じではないかと思ひますので、今日のお話を伺いまして私共もこの後さらに努力していきたいと思ひますし、今日のシンポジウムの中で皆様方から御意見頂戴して学ばせて頂きたいというところでございます。簡単ですが宮城大学の取組につきまして紹介を終わらせて頂きます。

ディスカッション

ファシリテーター

宮城大学基盤教育群 特任教授 畠山 喜彦



【畠山】

それではディスカッションを始めたいと思います。進行としては皆様から寄せて頂きましたコメントペーパーに対して、馬本先生・矢野先生から御回答を頂き、その後本学川村から補足をさせて頂きます。続きまして、フロアから挙手の上で追加の質問、意見、またはそれぞれの勤務校での実践等を紹介して頂いて話題を広げたいと思います。お三方から、約1分程度という形でまとめをして頂こうと思います。それでは、フロアから集まったコメントに対して馬本先生の方からよろしくお願いたします。



【馬本】

Q：ファカルティ・ディベロッパー（FDer）の研修の頻度について

A：年間5～6回ずつ養成講座を実施。先進的な大学から講師をお招きして、「そもそもファカルティ・ディベロッパーとは何か」、から始め、次に「誰が何をやるべきか」という議論を進めています。補助金を上手く活用し、アクティブラーニングの行動型の授業をする教員は、授業計画、資金計画をまとめて申請し、その実績を携えてメンバーに入ってもらうという事を伝えているので、事業に参画した人は、次の年からFDerになってもらっています。

Q：どうしてオープンな雰囲気で見意見交換ができるようになったのか

A：規模の大きい大学ではないので教員と職員の距離が近い。加えてFDerを中心とした、教員をリードする側の教員に学科で働きかけをしてもらったこと、学生との距離も近いという要因も考

えられます。

Q：高校生に対して行う授業の方法について

A：出前講義として出講することもあります。大学コンソーシアムの「高大連携公開講座」で、大学の授業を高校生向けにアレンジしたものを提供しています。併せて高校生が夏休みに入っすぐ「県大へ行こう週間」というのを設け、高校生、保護者、高校教員に大学のそのままの授業を見てもらうということをしています。アクティブラーニングの数値目標についてはこれまでの実績を踏まえつつ、しかし学部学科ごとに重点目標を協議しながら数値の基準を決めています。

Q：自己評価ルーブリックへの取り組みの成果・課題について

A：アクティブラーナーとしての達成度合いを学生に自己評価をさせていますが、こちらが「達成度が高い」と見ている学生ほど自己評価が低くなりがちです。つまりその目標が高いので自分に厳しく評価してしまう傾向があります。そのため、客観的に見えている部分と、自己評価のギャップをどうするか、これが課題の一つです。我々のためだけでなく、学生自身も様々な角度から自分の達成度合いを見えるようにしてやるのが重要と考えます。

Q：探究の時間で難しいと感じていることについて

A：グループでアイデアを出させると面白い意見が出てきますが、大事なのが自分がこれまで学んだ知識を踏まえた見方、考え方をしているかです。言わばなしではなく、自分が学びえた事実やデータをしっかり活用しているかが重要です。よく、課題をある程度こちらが与えてしまっているところからスタートしてしまっているのがありますが、むしろその問いを自ら立てさせ、そのためには何が必要かということを試行錯誤しています。

【畠山】

ありがとうございました。それでは矢野先生、どうぞよろしくお願いたします。



【矢野】

Q：オナークラスの決定方法について

A：大学側は関与せず高校側で決めています。各学年1組が文系オナー、5組が理系オナーで、通常のカリキュラム以外に外部との実践的なプログラムを頑張っています。担任と副担任が各生徒の指導に中心的に関わり、また担任を持たない高大連携担当教員が一人おります。

Q：他の高校との連携状況について

A：御紹介したコラボゼミをあの密度で附属高校以外とやっているのはほぼ不可能と思っています。ただ要望はありますので、物理的に近い所とは可能性を模索しています。また、中小企業の社長の講話などに関してはオナークラス以外の生徒も参加します。ディベート指導なども各クラスのベストディベーターが集まって、1年生と2年生とのディベート大会を行います。その際、指導や審査に本学教員が関わっています。

Q：やる気のない高校生がいた場合の対応について

A：授業や部活以外の負担が生徒にもあるので、そもそもやる気のない人は入ってきません。確かに始まったところは訳がわからずに入ってきた生徒もいましたが、最近の成果発表会は、基本的に1、2年生のオナークラス全員、保護者も来ますので、「私もああいう事したい」という方が集まっています。

Q：高校単位でなく、個人で連携できる可能性があるかどうか

A：個人として受け付けると、高校側の指導の責任の所在がよく

わからないので、個人の参加はいまのところないと考えています。また、企業訪問前における高校生と大学生の直接のミーティングですが、最近はある程度LINEなどで詰めるところを詰めてしまって、現実顔を合わせるというのは、直前の1回ぐらいで済んでいます。高校生は部活もあり受験もあるので大変だから、不必要な集まり方はしないで、やれるやり取りはLINEで済ませて、最後だけにしてくれ、と学生には言っています。プレゼン資料の作成は、高校に学生のほうが出向いて、コンピューター室などでグループごとにやりとりするという感じになります。

【畠山】

ありがとうございました。それでは最後に川村先生、よろしくお願いたします。

【川村】

先生方のお話を伺い、本学の課題として2つ考えました。1つは、外の力を巻き込むことです。教育委員会あるいは企業、そういったところを巻き込んでいくことが私どもでもできていません。もう1つは連携する上で高校生、大学生、高校教員、大学教員それぞれの力の入れ具合です。その辺りをお二人とも色々ご苦労されてきたところがあるんではないかと思っておりますので、加えてアドバイス頂ければと思います。

【畠山】

ここでフロアの皆様から補足、質問、またはご意見等ぜひここで挙げて頂ければと思います。

Q：連携にあたって大学との物理的な距離の課題があります。例えばSGHなどで予算がある場合はいいのですが、ブレイクスルーとなるアイデアがありましたら教えて頂けるとありがたいです。

【馬本】

広島も、庄原キャンパスは広島市内から高速バスで2時間位かかりますので難しいのですが、オープンキャンパスに参加できない人のための「ウェブ版オープンキャンパス」、ウェブサイト上で

色々な角度から写真や動画を提供するという事をやっています。そこに模擬講義の資料や学科紹介スライドなども公開していますので、部分的にそういったものを紹介して、できるだけ色々なかたちで知ってもらおう。実際に足を運んでいただけない場合にはこういった形で知って頂くという工夫をしています。

【矢野】

高校生とはできれば直接対面したいなと思っております。そこで私どもの大学では出前授業の年間予算は決まっていますが、オフアールがあれば、基本的にどんな遠い所でも断らないようにしています。予算と対応できる教員がいれば行かせて頂いており、こうした機会を大事にしたいと思っています。オープンキャンパスは年2回行っていますし、各高校の先生、生徒、保護者の訪問も受け入れております。



【川村】

宮城大学は交通の便がよろしくないのですが、オープンキャンパスその他の機会をぜひ使って頂くというのが一つかと思えます。また質問頂いた高校と探究学習での関わりも出来ましたので、そういった機会を生かしながら少しずつ増やしていければと思います。本学もこちらから出かける、着て頂く、両方とも取り組んでおりますので御相談頂ければと思います。

【畠山】

どうもありがとうございます。最後にまとめの一言、できれば外を巻き込むときの工夫などに触れていただければと思います。

【馬本】

県立広島大学はこれまで県立の学校との連携関係はどうだったのかという反省がありました。例えば附属高校のある大学がうらやましいなと思っていたのですが、発想を転換して、県立高校は全部うちの「附属」のような、そんな連携もありじゃないかということを考えるようになりました。大学の事務局の中には県庁から来る方々もあるのですが、たまたま教育委員会の勤務経験の長い人と一緒に工夫すると、県教委とのパイプがずいぶん太くなって、そこから今の取組に結びついています。私が抱えている課題としては、外の力を活用する教員を増やさないといけないと思っています。大学の教員が意識を変え、連携をする相手方と密に協議できるような雰囲気を作ってい

くことが重要と思います。

【矢野】

各高校の卒業生名簿をうまく使って頂いて、というのは先ほどお話した通りですが、ネットワークを持っている人が一人いると全然違います。卒業生名簿だけでなく、商工会議所とか中小企業家同友会に協力を求めるなどすると、反応してくれる企業もあります。中小企業にも志の高い方々がおられまして、地元の若者を育てるのであればということで、ご協力頂ける人々がたくさんいます。いくつかダメもとで訪ねて行って、こちらの方から営業しないとダメです。取組は立派だから向こうが協力を当然だ、とはならないです。また、各業界にも組合などいろんな形がありますので、どんどんドアをたたきに行く、という感じです。もう1点、先ほどでた、やる気のない学生をどうするかという事の補足です。矢野ゼミはガチゼミと言われており、つまり、時間割は制度上金曜の4時間目に決まっているけれど、4時間目5時間目6時間目とか続きますし、高校生とも何かしないとけない。それを楽しみと思えるかどうかだと思います。これを負担だ、バイトでもやっていった方がいいと思えば、私のゼミには来ません。こっちはいろいろな繋がりができるみたいだよ、というのを面白がってくれる学生が来ればそれでいいわけですし、それが全員じゃないのは当然わかっています。そういうところだと思って入って来ますから、なんかめんどくさいと思う子は別のゆるゼミに行きます。

【川村】

高大連携という取り組みが大学の宣伝の手段であるとか、受験生確保のための手段であるということではなくて、日本の教育のあり方を変えていくうえで、非常に重要な一つという事が確認できたような気がします。宮城大学としましても、公立大学の立場で同じような条件下にある中では、まだまだ取り組まないとけない、そういう課題が見えてきたような気がいたしました。これから宮城大学という事だけではなくて、宮城県、あるいは東北地方、もっと言えば日本全体、こういったことの教育のレベルアップ繋がるような取り組みをしていく、そういう気持ちを新たにしたいところでございます。どうも貴重なお話ありがとうございます。

【畠山】

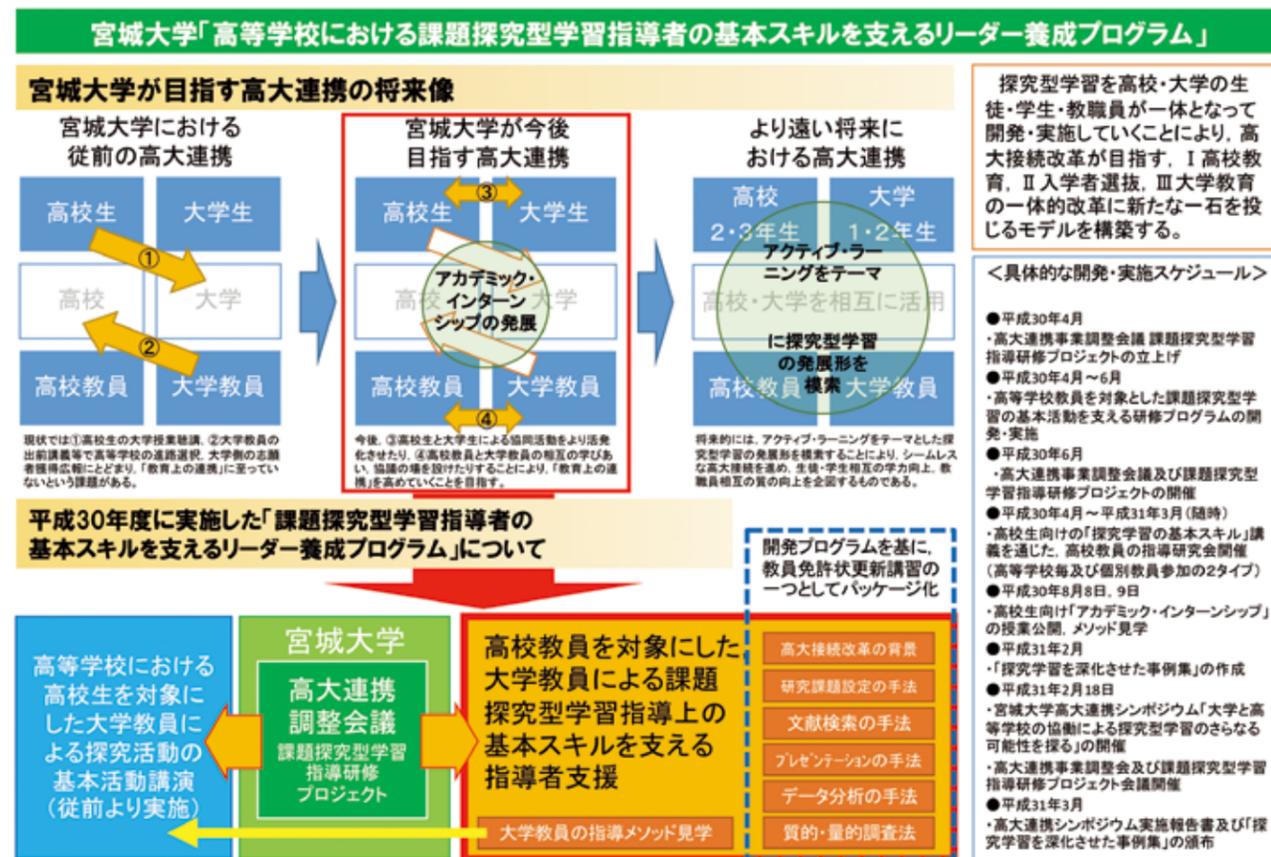
皆さま、勉強になるお話をお聞かせいただきありがとうございます。以上で終了したいと思います。

アンケート集計結果より

1. 所属について					
大学関係者	2名	高校教員	32名	その他	3名
2. 参加動機について（複数回答可）					
シンポジウムの内容、テーマに興味があった	23名				
講師講演に興味があった	8名				
宮城大学の高大連携に興味があった	20名				
他大学の取組を参考にしたいと思った	5名				
その他	1名				
3. 内容について					
○シンポジウム全体について					
良かった	29名	どちらでもない	0名	改善すべき	1名
○基調講演について					
良かった	37名	どちらでもない	0名	改善すべき	0名
○宮城大学の取組紹介について					
良かった	23名	どちらでもない	6名	改善すべき	4名
○ディスカッションについて					
良かった	23名	どちらでもない	4名	改善すべき	3名
【自由記述から】					
・ディスカッションの時間をもう少しとってほしかったです。					
・ディスカッションで探究学習とは何かという点をもう少しつっこんでほしかったです。					
4. 所属組織で抱える「高大連携」や「探究型学習」を進める上での、工夫・課題について					
・教員間の意思疎通がとれていない					
・高大連携に関する相談窓口、機関の情報を持ち合わせていない					
・予算と時間の確保が難しい					
・場所的な課題があり、生徒が大学を訪問しにくい					
・「探究」に対するイメージを教員が持っていない					
5. 宮城大学の高大連携事業に対する希望・要望					
・連携の相談窓口がどこか教えてほしい					
・アカデミック・インターンシップの内容をより探究的に、長期的にしてほしい					
・高校と大学の教員の交流を活性化させる中核となってほしい					
・高校教員研修会を継続してやってほしい					
・インターネットを活用した、物理的な訪問が不可能な場合の連携手段を検討してほしい					

独立行政法人教職員支援機構 「平成30年度教員の資質向上のための 研修プログラム」概要

プログラム名	独立行政法人教職員支援機構 平成30年度教員の資質向上のための研修プログラム開発支援事業 宮城大学「高等学校における課題探究型学習指導者の基本スキルを支えるリーダー養成プログラム」
プログラムの特徴	宮城大学では、これまでも宮城県はもとより近隣の高等学校との高大連携を重視し、平成28年から年2回のペースで「高大連携事業調整会議」を開催している。本会議は、探究型学習に関心を示す、東北地域の高等学校の探究型学習指導担当者が出席し、高大連携における探究型学習の課題等の意見交換を行うことを主たる目的としている。その中で、高等学校からは日常の探究学習の指導において、テーマ設定、仮説の立て方、統計分析などの面で課題を抱えるとの声も多く聞かれる。これらのニーズを踏まえ、本学教員の専門分野を活かし、探究活動の指導に活用できるノウハウを体系化した研修プログラムを開発・実施し、その成果物として「探究学習を深化させた事例集」を作成して頒布する。 なお、平成30年度からは「高大連携事業調整会議」において、本学教員及び高等学校教員から構成する課題探究型学習指導研修プロジェクトを併催し、本プログラムの継続的な改善を促す体制を構築していくこととしたい。



開発の目的・方法・組織

①開発の目的

宮城大学は、「地域に根ざした教育重視の公立大学」として、宮城県はもとより近隣の高等学校との高大連携を重視してきた。その中の取組みとして、平成23年度から継続して実施している高校生を対象とした「アカデミック・インターンシップ」では、学問的探究の楽しさを高校生に伝え、指導を行っている。また、平成29年度からは、複数の高等学校の「総合的な学習の時間」を担当する教員と協働し、高等学校の年間プログラムとして「探究学習の基本活動」について、アクティブラーニングの手法を用いながら、高等学校の教員とともに本学教員が直接高校生に指導を行っている。さらに、その年間プログラムで出てきた指導上の課題を、高等学校の教員

と共有し、課題解決に向けて検討や研究を重ねてきているところである。これらの一連の取組みの中で、高等学校からは日常の課題探究型学習の指導において、テーマ設定、仮説の立て方、統計分析などの基本的なスキル面で指導上の課題を抱えるとの声も多く聞かれている。

このような背景・趣旨から、高等学校の現場で起こっている課題探究型学習の指導上の課題を解決するために、大学のリソースを活用した課題探究型学習指導者の基本スキルの習熟を支援するプログラムを開発・運営することにより、高等学校における課題探究型学習指導のカリキュラム・マネジメントを担うリーダーを養成していくことが本プログラムの目的である。

②開発の方法

本プログラム開発開始と同時期に、全学横断プロジェクトチームである「宮城大学高大連携プロジェクトチーム」が平成30年4月に発足し、プログラム申請時から一部メンバーの変更、追加が発生しているが、プログラム開発は本プロジェクト内で組織的に実施された。

プログラム開発前の平成30年2月に実施した「平成29年度第2回宮城大学高大連携事業調整会議」の中で、高等学校進路指導担当者の高大連携ニーズの確認や、宮城大学が目指す高大連携の姿について説明を行う中で、高等学校から「高校の教員研修会の場において、探究学習を進めていく上での考え方を共有したい」という要望があった。このことを契機に、第1段階として宮城県富谷高等学校との打合せを重ねながら、「高大接続改革から見る探究学習実施の背景」と「探究学習を指導する上でのポイント」の2本立てでの教員研修プログラムを実施した。

ここで実施された研修プログラムを平成30年6月に実施した「平成30年度第1回宮城大学高大連携事業調整会議」の参加高等学校に情報共有を行うと同時に、各高等学校で抱える探究学習の課題について意見交換を行うことにより、開発した研修プログラムの再検討に着手した。

また、第2段階として、例年宮城大学で実施している高校生向け公開講座「アカデミック・インターンシップ」に、高等学校教員が講座見学することを通じ、大学での探究的な学びについて理解を

深める取組を実施した。台風等の影響で一部中止を余儀なくされ、当初想定したほどの効果を得ることができなかったものの、講座見学した教員からは大学での指導方法について理解を新たにしたといったような反応が得られた。

その他、教員研修会の実施までには至らなかったものの、宮城県古川高等学校等から新たに高等学校の探究学習支援をお願いしたいという声を頂き、高等学校が企画する探究学習プログラムについて大学教員が指導助言を行うといった事例も新たに生まれた。

このような取組や高等学校側からのアプローチを通じて、次第に高等学校側のニーズが「探究学習を行う背景の理解」「課題設定方法の理解」「仮説検証に必要なデータ分析手法の理解」「学生の発表を支援する手法の理解」の4点に大別されることが把握できた。そこで第3段階として、これらを一つの研修プログラムとして、複数教員によるオムニバス講座を開発し、これを本学で実施している「教員免許更新講習」の1プログラムとして試行的に実施を行った。

これらを踏まえ、高等学校教員と大学教員が連携しながら探究型学習を深化させていくことをテーマとしたシンポジウムを開催し、先進大学の事例から学ぶ研修と位置づけた。本シンポジウムは、今後高大連携を通じた相互の教育力向上に向けた新たなスタートを切るキックオフとなった。

以上、当初計画から若干の変更点はあるものの、概ね計画通りプログラム開発は実施され、その実施に伴う高等学校側からの評価も良好にある。

③開発組織 本プログラムは、以下「宮城大学高大連携プロジェクトチーム」内で開発を行った

No.	担当	氏名	具体的な業務所掌
1	高大連携担当副学長・理事	徳永 幸之	本プログラム総括担当者
2	食産業学群教授・基盤教育群長	川村 保	本プログラム実施責任者
3	基盤教育群准教授	川井 一枝	プログラム運営、実施庶務担当
4	看護学群教授	菅原 よしえ	プログラム運営、実施庶務担当
5	事業構想学群准教授	佐々木 秀之	プログラム開発、運営担当
6	事業構想学群准教授	石田 祐	プログラム開発、評価担当
7	事業構想学群准教授	石内 鉄平	プログラム開発、運営担当
8	食産業学群准教授	原田 弘一郎	プログラム運営、実施庶務担当
9	特任教授（高大連携アドバイザー）	畠山 喜彦	研修コーディネーター、連携協議会調整担当
10	事務局企画・入試課	菅原 正義	広報、実施庶務担当
11	事務局企画・入試課	高橋 征史	広報、実施庶務担当
12	事務局企画・入試課	岸根 大輔	プログラム運営、実施庶務担当



宮城大学
MIYAGI UNIVERSITY

宮城大学高大連携シンポジウム

「大学と高等学校の協働による探究型学習のさらなる可能性を探る」

実施報告書

発行：平成 31 年 3 月

発行者：宮城大学高大連携プロジェクトチーム

TEL: 022-377-8594 FAX: 022-377-8282

WEB: <http://www.myu.ac.jp>

E-mail: kouhou@myu.ac.jp